

第4回 ようこそ考古学

絵図が語る 江戸の町と村

(財) かながわ考古学財団 渡谷正信



2007. 11. 7(金) かながわ県民センター 会議室

はじめに

江戸時代中期以降木版刷りの普及で御府内（江戸の市中）は多くの絵図が刊行されました。現在それらはいろいろな形で復刻され、私たちも書店などで目にする機会があると思います。これらの絵図は近世の埋蔵文化財調査に対しても、当時の土地利用状況を知る上で良い資料となります。

今回は以前私が担当して発掘調査を行った大京町東遺跡（旧四谷第二中学校校庭 東京都新宿区大京町1-3他）を例にとって、絵図からの情報と実際の発掘成果から、下級武士の住まいのある側面を考えたいと思います。

また、御府内だけではなく村にも目を向けて、10月まで調査をしていた茅ヶ崎市上ノ町遺跡周辺の明治初期に作られた地籍図を見て頂き、地籍図とはどのようなものかを紹介できればと思っています。

遺物は大京町東や上ノ町遺跡で出土したものではなく、遺跡にはこだわらず江戸時代にポピュラーな肥前系磁器を用い、文様などについてお話ししたいと思います。

江戸図の変遷

江戸時代には多くの地図が作られましたが、木版印刷の普及で民衆にも広く利用されました。江戸では他地域よりも多く作られ、江戸を描いたものは一般に「江戸図」と呼ばれています。中でも江戸後期に作られた絵図は、江戸全域を一枚に描いた絵図に対して、ある一部を区切って作られているため「切絵図」と呼ばれています。

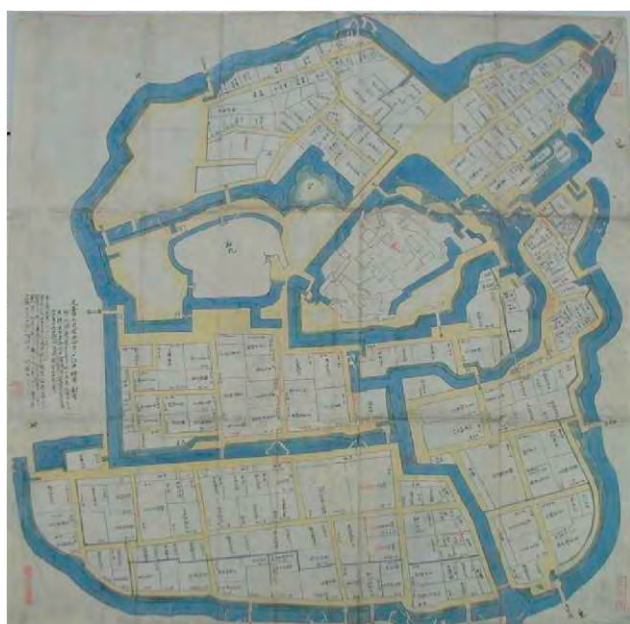
次に江戸図の変遷を追ってみましょう。

江戸時代初期

明暦大火（1657）以前

- ①「慶長江戸絵図」（1608年。『古板江戸図集成』第一巻、中央公論美術出版、1959（2000年改訂版第一巻）所収）。実測に基づいて描かれたと推測される正確な絵図ですが、後年の作ともいわれています。これは幕府を開いた当時の姿を表しています。
- ②「武州豊嶋郡江戸庄図（寛永江戸図）」（寛永九年・1632年『古板江戸図集成』第一巻所収）。これは最初の木版江戸図を書写したもので、三代将軍家光の頃で、そろそろ江戸の町づくりの基礎ができつつある頃の姿です。
- ③「正保年間江戸絵図」（正保元年・1646年『古板江戸図集成』第二巻、1958〈改訂版第一巻〉所収）。②と同様の木版図の写図です。
- ④「新添江戸之図（明暦江戸図）」（明暦三年・1657年。『古板江戸図集成』第二巻、1958〈改訂版第一巻〉所収）。後年の複製図ながら当初の刊記を載せた最初の絵図で、明暦大火直前の江戸の様子を描いています。ちなみに、新添とは江戸の南西方面を拡大して新しく添えたという意味です。

初期の絵図



①『慶長江戸絵図』 80.5 × 81.9 cm
「東京都立図書館HP 特別コレクションの紹介 第15回」より



②『武州豊嶋郡江戸庄図』 100 × 130 cm
「東京都立図書館HP 特別コレクションの紹介 第11回」より

明暦大火後

⑤「明暦江戸実測図」(全体図は飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』口絵等に所収)。大火直後に幕府が行った測量調査をもとに作成されたきわめて精度の高い絵図です。

⑥「江戸大絵図」(財団法人三井文庫蔵。地図資料編纂会『5千分の1江戸ー東京市街地図集成1』柏書房、1988所収)。紀州藩が作成したと推定されるもので、大火直後の状況を美しい色彩で描いています。

17世紀後半からの木版図刊行時代

17世紀前半の江戸図と比較すると、都市域の拡大とも相まって収録範囲が広がっているのが特徴です。

⑦「新板江戸大絵図 (寛文五枚図)」(寛文十～十三年・1670～73年。『古板江戸図集成』第三巻、1959(改訂版第二巻)所収)。⑦は⑤の縮寸公刊版で、江戸府内外の広い範囲を収めています。これは「寛文五枚図」と呼ばれ、「江戸図の祖^{おや}」と称されるもので、後の江戸図に大きな影響を与えました。『新板江戸大絵図』1枚と、それを取りまく『新板江戸外絵図』4枚からなっており、精度の高い実測図です。

⑧「江戸方角安見図」乾・坤(延宝八年・1680年『古板江戸図集成』第四・五巻、1958～59(改訂版第三巻)／朝倉治彦編『江戸方角安見図』東京堂出版、1975、所収)。⑦を区分図に改め、冊子体にしたものです。以後江戸中後期には毎年のように改訂されて、非常に多くの木版図が作られるようになりました。



↑④『新添江戸之図』 123 × 62 cm
「東京大学附属図書館HP 所蔵資料展」より



⑤『明暦江戸実測図』(部分) 「江戸図の歴史」より

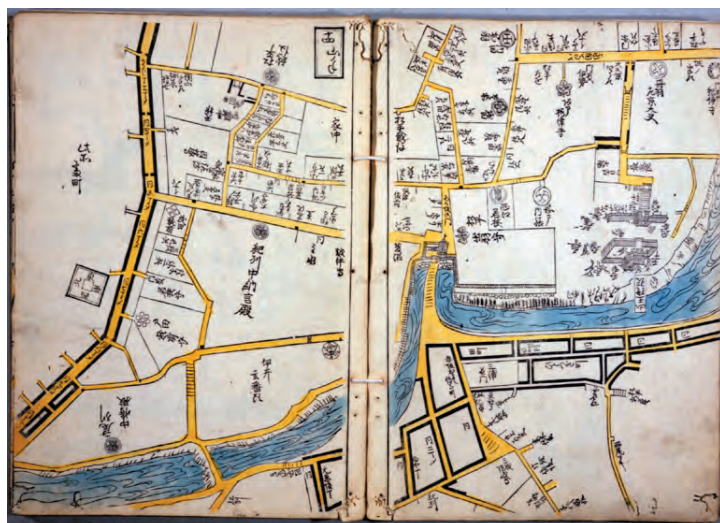


⑥『江戸大図』
「コレジオHP」より

290 × 198 cm



⑦『新板江戸大絵図』 156 × 163 cm
「東京都立図書館HP 特別コレクションの紹介 第11回」より



⑧『江戸方角安見図』(一部) 32 × 32 cm
「東京大学付属図書館HP 所蔵資料展」より

切絵図の出現

18世紀半ば

江戸全体図に加えて本格的な切絵図が刊行され始めました。その最初は、美濃屋板（吉文字屋枚）と呼ばれている絵図です。この吉文字屋板切絵図は、1755年（宝暦五年）の「番町絵図」を皮切りに、以後「駿河台小川町図」「芝愛宕下絵図」と続き、安永四年（1775年）の「築地八町堀日本橋南絵図」までの計八枚で刊行が中断されました。江戸府内全体を網羅するには至っていませんが、番町絵図（内堀と外堀の間で四谷・市ヶ谷駅の東側）から始められたことからわかるように、もともと武家屋敷の所在を示すことを主目的として作られた絵図でした。

幕末期

近江屋板（近江屋吾平板・近吾堂板） 嘉永元年（1848）～嘉永四年（1851） 明治維新を迎えるまで頻繁に改訂され、計31枚で江戸全域をカバーする絵図群です。

尾張屋板（近鱗堂） 嘉永二年（1849）～嘉永七年（1854）「大名小路神田橋内内桜田之図」に始まり「染井王子巢鴨辺絵図」でいったん完了しましたが、たびたび改訂増補され、計31枚の刊行です。

平野屋板 嘉永二年（1852）に刊行され、現存するのは3枚（4枚板行されたとの説あり）があるのみで、江戸府内の一部のみの刊行です。

（『図説江戸考古学研究辞典』柏書房 参照）

これら4種類の切絵図は現在様々な複製がつくられており、斉藤直成篇『江戸切絵図集成』全6巻（中央公論社、1981～84）、『別冊歴史読本 江戸切絵図』（新人文往来社、1994）、『江戸切絵図 嘉永・慶応 尾張屋清七板』（人文社、1995）、『尾張屋版 嘉永 - 文久板行 江戸切絵図』（岩崎美術、2004～05）等があります。

私たちは現在いろいろな形で江戸図にふれることができますが、最近ではデジタル化されているものもあり、ネット上で提供されている切絵図もあります。ちなみに『goo 地図』の中の「古地図」は切絵図を、『Google Earth』では1680、1799、1858、1892年の江戸図を提供しています。また、市販されているものでは『江戸東京重ね地図』というものもあり、現在の地図と切絵図が完全に重なり、しかも透過性を持たせ、徐々に現代の地図から江戸切絵図に変化していくという優れ物です。

このように無料で楽しめる切絵図もありますので、現代の地図と重ねあわせて眺めてみるのも楽しいと思います。

切絵図はきれいに彩色されていますが、この色分けによって武家屋敷や寺社等が表現されています。また、切絵図をよく見ると名前の向きがバラバラになっていることに気づくと思いますが、これは表門の向きで、名前の頭の方に表門があるということを表しています。



江戸の境界線

慶長～寛永年間（1596～1643）に成立した町並みは古町と呼ばれて、およそ 300 町あったそうです。明暦の大
火後は大胆な再開発が進められ、このとき新たに 300 町が町奉行所の支配下に加わり、674 町に増えました。さ
らに正徳 3（1713）年には 259 町が加えられ、江戸は全体で 933 町に拡大しました。

このように拡大する江戸の町ですが、江戸と言ってもどこまでがいったい江戸の範囲だったのでしょうか。江戸中期くらいまでは幕府も明確な定義はなく、行政上の支配系統によって独自に範囲が設定されていました。具体的には次にあげたようなものです。

- ### ①町奉行が支配の対象とする範囲

江戸の町人地に限定され、町人地の発展とともに外延へ拡大。

- ②寺社勧化場として許可された範囲

勸化場…寺社建立等のため寄付を募ることを許可された地域。

- ### ③江戸払の御構場所とされる範囲

御構場所…追放刑者が立ち入ってはいけない地域

四宿（千住・板橋・品川・内藤新宿）以内と本所・深川。

- ④札幌場（芝口）が対象範囲とする範囲

札縣場…その対象範囲における変死者や迷子の年齢・衣服の特徴等を高札によって掲示した場所

- ⑤旗本・御家人が外出を届ける際の範囲

江戸御曲輪内から四里以内。

(「東京都公文書館」ホームページより作成)



「朱引」——寺社觀化場境筋
「墨引」——町奉行所支配場境筋

町奉行所の支配地は「町人地」と呼ばれましたが、行政上は町奉行の支配を受けながら年貢は代官に納めるとか、寺社奉行の管轄下にある寺社の門前町が町奉行支配となった場合もあったようで、そのように代官と町奉行の支配を受けていた場所を「町並地」といいました（ちなみに江戸の町には年貢が課せられていませんでしたが、町並地には年貢が課せられ、徴収は代官が担当し、町奉行は戸籍を管轄していました）。

延享2(1745)年から翌年にかけて、寺社奉行管轄の門前町が大量に編入されると、江戸の総町数は1678町にまで膨れ上がりました。

ここまで町屋(市街地)が広がると、「どこまでが江戸なのか」ということが問題となってきた、文政元年(1818)8月に、目付牧助右衛門から「御府内外境筋之儀」についての伺いが出されました。評定所で入念な評議が行われた結果、同年12月に老中阿部正精から「書面伺之趣、別紙絵図朱引ノ内ヲ御府内ト相心得候様」と、幕府の正式見解が示されました。

下級武士の住まいの地下空間（大京町東遺跡を中心に）

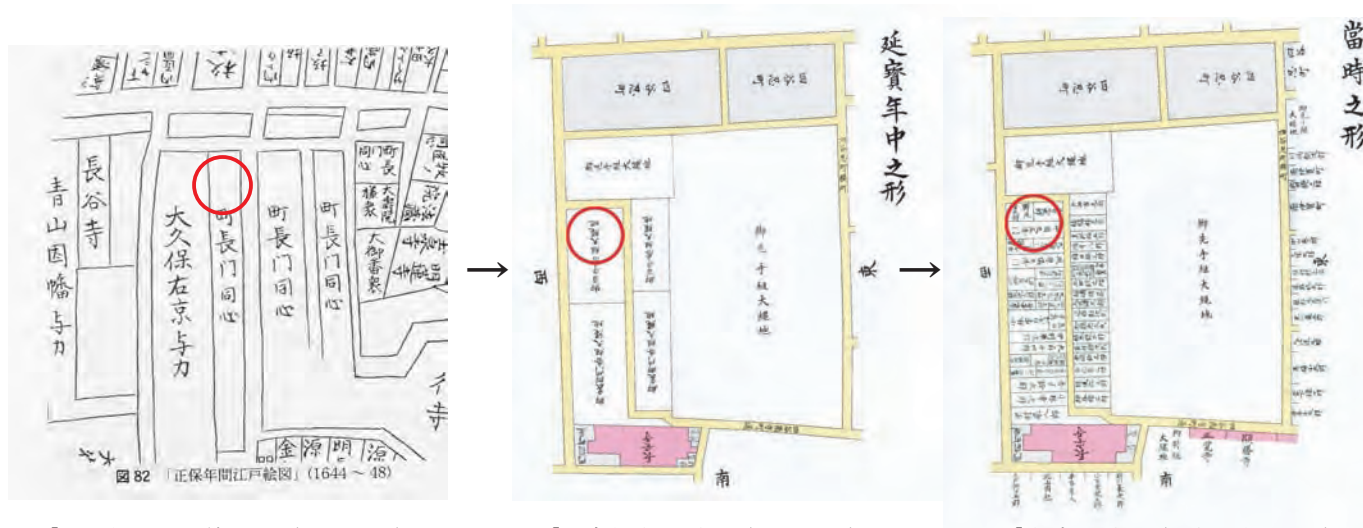
これまでは江戸図をお話してきましたが、これからは私が担当で発掘しました大京町東遺跡(2003年発掘調査)を例にとって、発掘のときの絵図の利用についてお話したいと思います。

尾張屋板江戸切絵図の『四ツ谷絵図』では、当地には「幸田・野尻」という名前が見えます。『御府内往還其外沿革図書』(以下沿革図書と略す)では、「幸田・野尻・平岡」の名前が見え、延宝年間には御留守居組大縄地



『尾張屋版 嘉永-文久板行 江戸切絵図』より (一部改変)

『大京町東遺跡』より



「正保年間江戸絵図」(1644~48)

「延宝年中之形」(1673~81)

「當時之形」(文久2年 1862)

『大京町東遺跡』より (一部改変)

『御府内往還其外沿革図書』
『地図で見る新宿区の移り変わり 四谷編』より (一部改変)

であったことが確認できます。大縄地とは聞き慣れない言葉だと思いますが、大縄地とはいったい何でしょうか。

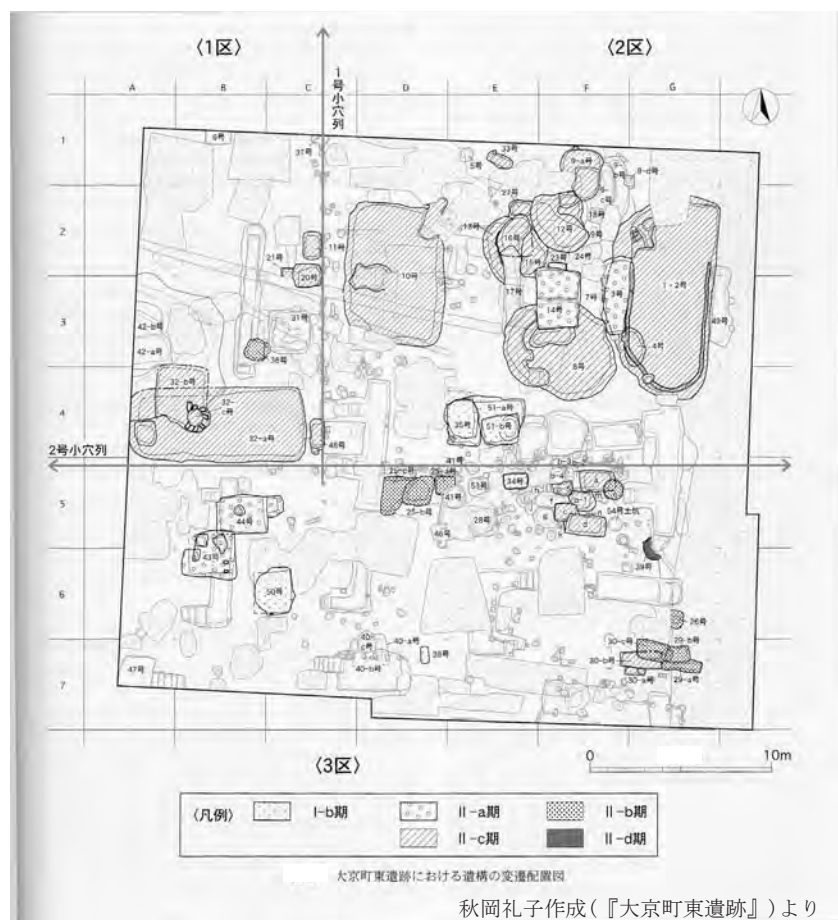
大縄地は大縄組屋敷や組屋敷大縄地とも呼ばれ、「御徒や百人組・先手組・持組などの与力・同心が集住するために設けられた居住地のこと」(『国史大事典』4、吉川弘文館 1984) です。土地は組に一括して下賜され、各々の役職によって配分されました。組屋敷の入り口には木戸が設置され、周辺と区切られた空間を形成している場所もあったそうで、現在でいうところの公務員の社宅に相当するといった感じでしょうか。与力は300坪、同心は100坪程度だったようです。

大京町東遺跡は先手組大縄地から正保年間(1644～48)～明暦3年(1657)の間に留守居組大縄地に替わり、宝永3年(1706)に個別の拝領武家屋敷となりました。

この発掘対象面積は1000㎡強だったのですが、ピット列が検出され、それらは幸田・野尻・平岡を分ける境界と考えられます。これらの発掘調査の成果と絵図・文献調査をもとに、幕末の3軒のお宅をちょっと覗いてみましょう。武家屋敷の住まいの構造などについてはいろいろな本が出版されていますので、興味のある方はそちらを見て頂くとして、ここでは二つのキーワードで、今日のサブテーマでもある「住まい」に若干触れたいと思います。

まず一つ目のキーワードですが、「地下室」という言葉です。これは「チカシツ」と読むのではなく、江戸遺跡研究の中では「チカムロ」と呼ぶことが定着していますが、穴蔵の名称を用いる人もいます。

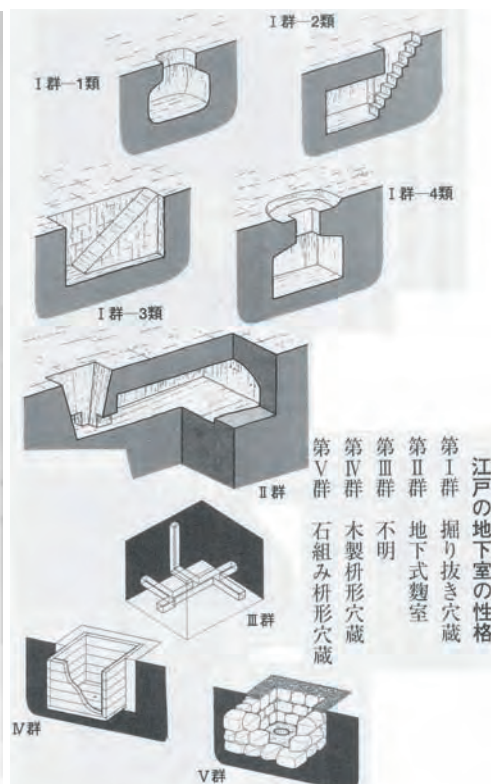
大京町東遺跡では35号遺構、40-b号遺構、43号遺構、47号遺構などですが、図示した分類からすると、40-b号遺構はI群-2類、35・43号はI群-1類に当てはまると思われます。これらの地下室のパターンは以



秋岡礼子作成(『大京町東遺跡』)より

- I-b期：1640・50～宝永3年(1706) 留守居与力組屋敷
II-a期：宝永3年(1706)以降～1720年代 個別屋敷拝領地への移行から享保年間(1720年代)の火災まで
II-b期：1730年代～文政年間(1820年代)の火災まで
II-c期：1830年代～1840・50年代 相对替および火災まで
II-d期：～明治初年(1820年代)頃の屋敷地引き払いまで

『大京町東遺跡』より



『図説 江戸考古学』より(一部改変)



27号遺構 遺物出土状況(南より)

下に示した通りですが、武家屋敷の地下室Ⅰ群に示されたものの用途について、古泉弘氏は『江戸の穴』（柏書房1990）の中で次のように述べています。

「こうした穴蔵は建設経費や土地の問題から、土蔵の代用として造られたものではなく、災害時の非常用施設として、土蔵とはやや異なった機能を評価されて設けられた可能性がある」

また、棚木真氏は「地下室再考」（『住吉町遺跡』）の中で、「平常時地下室は、ほとんどカラの状態であり、延焼の危険があるときはじめて家財が運びこまれていると理解できる」と言っています。

つまり、江戸の町が火災になったとき、火が及ぶ前に家財道具を地下室に入れ、家人はどこか安全な所に避難して、火事が治ったら戻ってきて取り出すといったところでしょう。

しかし、それだけではなく投げ捨てられたような遺物も出土することもあり、地下室が廃絶された場合、ごみ穴に転用されることもあったようです。

次のキーワードは、いま出てきた「ごみ穴」という言葉です。大京町東遺跡でも数多くのごみ穴（1・2号、8号、10号、14号、16号、27号、32-a・b号遺構等）が検出されました。「こんなにいっぱいあるの？」という疑問がわくかもしれませんし、「屋敷の庭先にごみ穴？」と思われる方も多いと思います。ところが庭先だけではなく、区画の小穴列の地割りに沿うように大型のごみ穴が造られていることがわかつています。

これらのごみ穴からはどのくらいの量の遺物が出土したかという、たとえば1号遺構だけで出土総遺物重量の約1/4を占めています。

これらの遺物から廃絶された時代を見てみると、前ページ表のⅡ－c期（1830年代～1840・50年代）で、切絵図と「沿革図書 当時之形」に描かれた年代と同時期と考えられます。

ごみ穴の規模と遺物量からみると、1、2軒の家から出たごみを処理するために掘られた穴ではなく、外からのごみが持ち込まれたと考えられます。大京町東遺跡の立地している内藤新宿という場所がら、旅籠や料理屋からと推測される遺物が出土しています。たとえば釘書きがされたいわゆる貧乏徳利や、大皿・鉢類、碗などが多量に出土しました。

このような状況を目の当たりにすると、どうも屋敷地にごみを捨てさせていたのではないかと思われてきます。では庭先に大きな穴を掘って、ごみを埋めさせて日々の生活はできたのでしょうか。

このことについて文献調査の結果から、意外なことがわかりました。安政3年（1856）に成立したとされる『諸向地面取調書』^{注6}に、幸田という名前を見つけることができます。それには千石右近支配の小普請組の「拝領屋敷、四谷右京町、二百五十坪、幸田元太郎」とあります。そして注記には「右者地守附置、当分四番町小普請曾根栄之助長屋借宅」あり、当地に地守を置いて貸し、本人は四番町（現千代田区）の小普請曾根栄之助の長屋に借家していたということなのです。また、この人物は当地と同じように小石川安房町の拝領屋敷（100坪）に地守を置いて貸し、一方で同じ組の喜多村孫之丞という人の屋敷（小川町二番原500坪）内の長屋を借りていたこともわかりました。そして、幸田元太郎さんは武家屋敷を扱う不動産業的なことを行っていたようなのです。

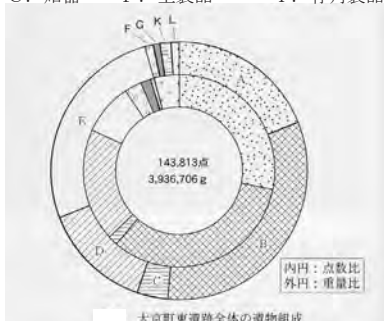
このようなことを考え合わせると、大京町東遺跡のごみ穴は故意に造られたことが窺え、拝領屋敷地がさながら現代の廃棄物処理場のような場所になっていたというイメージをわかせます。

このようなことは当地の幸田さんに限ったことだったのでしょ

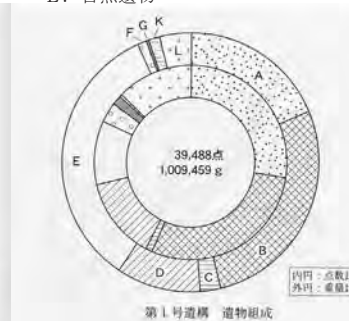


『大京町東遺跡』より

- | | | | |
|-------|--------|---------|----------|
| A. 磁器 | D. 土器 | G. 金属製品 | J. ガラス製品 |
| B. 陶器 | E. 瓦 | H. 木製品 | K. 石製品 |
| C. 珧器 | F. 土製品 | I. 骨角製品 | L. 自然遺物 |



遺物組成表・グラフ



『大京町東遺跡』より



大京町東遺跡全景

『大京町東遺跡』 より

ます。両遺跡とも持組大縄地でした。^{注7}

三栄町遺跡は現在の新宿区歴史博物館があるところで、博物館建設に伴い 1985 ～ 86 年にかけて発掘調査が行われました。この時に長さ 22.4 m 深さ 4.7 m を最大に、同規模の 3 基のごみ穴が検出されました。このことについて谷川章雄氏は『三栄町遺跡』の中で、「幕府の禁じていたいわばごみの不法投棄がおこなわれていたといわざるを得ない」とする見解を示しています。

一方、三栄町遺跡から東に 150 m ほどに位置する坂町遺跡（調査は 2001 年）で検出されたごみ穴は、長さ 20 m、幅 2.5 m、深さ 4 m のものです。18 世紀後葉を主体とする遺物が出土し、その総数 10.9 万点弱、重さ 4.6 トンにおよんでいます。大京町東の 1000 m² 強の出土遺物の総重量に、4 トン弱に比べると、一遺構でこれだけの量が出土したことには驚かされます。

谷川氏は江戸のごみ問題について、『三栄町遺跡』の「三栄町遺跡をめぐる問題」の中で、「このことは文献の上から見た制度としてのごみ処理の方法と整合しないのである」との見解を示しています。一方、大八木謙司氏は両遺跡における大型ごみ穴の検出について、『坂町遺跡』の総括の中で次のように言っています。

「無秩序的な不法投棄とは隔たる、組単位での計画的かつ管理された土地利用のありようが看守される。それは、経済性を高めつつ掘削・埋没させようとする意図と、いかに効率よく大量の廃棄処分を行おうとするごみ収集業者の意図により、複合的に形成された廃棄のプロセスであろう」

つまり大八木氏は、個人的ではなく組単位で計画的かつ管理された土地利用があり、廃棄だけではなく、掘削された土量に目を転じて、280 m³、10 トントラックで 47 台分もの採土を経済財として利用した可能性も示唆しています。

では、幕府の示したゴミ処理方法とはどのようなものだったのでしょうか。伊藤好一氏によれば、家々のごみは町の大芥溜に集められ、船で幕府の指定した捨人が永代島に運んで捨てたというものです。大京町東遺跡で文献調査を担当した赤澤春彦氏は、岩淵令治氏や榎木真氏の研究成果から、伊藤氏の明らかにした廃棄物処理システムが江戸全てに統一的行われていたのではなく、地域性をもっており、新宿四谷など山の手地域では明地へ^{あきち注8}

のごみの廃棄という別のシステムが想定され、それが新宿区内に大規模なごみ穴が存在する理由の一つだと推察しています。

谷川氏が言っているように、ごみの不法投棄を幕府は認めているわけではありません。しかし、発掘調査で明らかになった大型ごみ穴の存在は、幕府の建前とは別な市井の人々の生活の、実態のある側面を示唆しているように思われます。

地籍図

ここまでは江戸御府内を眺めてきましたが、かながわ考古学財団の考古学入門講座ということで、神奈川県にも目を向けたいと思います。私たちは神奈川県全域で埋蔵文化財の調査を行っており、その際参考になる様々な絵図が残されています。江戸時代には村の略図のような絵図があったりもします。そのような絵図の中で私たちが近世の調査で利用するのに明治6年の地租改正にとまって作られた地籍図があります。地籍図はこのときのものだけではなく、現在でも土地登記や固定資産税関係の時に使用されるものです。もちろんここでのお話の場合は現在使用されているものではなく、明治初期のものを地籍図と呼び、話を進めさせていただきます。

明治政府は明治5年に田畑の永代売買の禁を解き、土地の自由売買を許可し土地の所有者を確定しました。地籍図とはこのときの固定資産税の基礎となる土地課税台帳、土地登記簿に付属した地図で、土地の区画を示す境界と地番、地目などが書かれたものです。これは村や字単位で描かれているため字限図や村限図、と呼ばれることもあります。これらは明治政府が全国規模で作成させたもので、そのための専門の地図制作者等がいるわけではなく、政府は『地租改正着手心得書』を出し指示しましたが、作成はその土地の人たちに任せられ、描き手も村々で異なっていました。

地籍図の作成された時代は、ちょうど「大区小区制」の頃で、地籍図にもその表記がなされています。「大区小区制」とは明治4年(1871)～明治11年(1878)に施行された地方制度で、府県下に大区を置き、大区の下に小区をつくるというものです。江戸時代の庄屋などの村役人を廃止し、戸長・副戸長を置き、慣れ親しんだ村の名も公式上排除し、複数の村をあわせて番号で示すというものです。神奈川県は明治5年に武蔵国多摩郡を編入し、9年には足柄県廃止に伴って相模川以西の相模六郡を編入しました。そののち明治26年に三多摩地域を東京府に移管し、現在の行政区に至っています。明治9年の神奈川県は23大区、208小区となっています。

ちなみに、大区小区制は明治政府の近代化を急ぐあまり、固有の習慣文化から乖離した、中央の命令伝達と施行しか考えないという施策が不評で、7年間で廃止になりました。

地籍図に話を戻しますと、明治初期に描かれたこの地図に表された土地の姿は、江戸のそれとはほとんど変わるところがないと思われます。そのため近世の土地景観の復元に有効な史料になりうると考えられます。桑原公彦氏は『地籍図』の中で「地籍図の中には現代・近代はもちろんのこと、近世・中世さらには古代・原始時代に至るまでの諸事象が包蔵されていることが多い。少し大げさにいえば、地籍図は原始時代から現代までの人類および自然の営みの全課程が集約されたもの」との見解を示しています。

地籍図は土地の区画（一筆）ごとに地目^{注9}が示され、同縮尺（村限図では1/600等）で描かれており、字や村の中ではだいたい現在の地図と合わせることができます。ただ、隣村と合わせようとすると、微妙に合いませんし、複数村と接している場合は、その歪みは大きくなります。



上・下『神奈川県明治期地籍図』より



『歴史的景観の復元』より

地籍図の利用方法は色々と思いますが、埋蔵文化財調査の場合、発掘している場所が近世においてどのような場所だったのかを見ることができます。たとえば、当該地が現在宅地になっているところが、江戸時代後半には田んぼだったとか。その場合はまず水田に注意しながら調査を進めなくてはなりません。また、報告書作成時に明治初期における周辺の土地利用の姿として利用しているものもあります。余談ですが、現代の航空写真と戦後すぐの写真を比較して、土地利用の推移を載せている報告書もあります。

桑原公德氏は『歴史景観の復元』(古今書院)の中で、青森県三戸町にある小字「館」の地籍図から、領域の形態や、内部の地割・地目を考慮し上記の図を作成し、次のように述べています。

「防御的施設を備えた豪族の屋敷が、一つの小字にまとまり、現在の地割と地目にかつての屋敷地や堀の跡が現れている」

上記の図について桑原氏は細かな説明はしていませんが、この図の中央、畑になっている所がちょっと小高くなっていて、そこに居館を建て、その周りを林が取り囲み、その外側に堀、水田が広がり、そのまた外にもう一重の堀が廻るという地形が想像できると思うのですが、行ったことがないのでわかりかねます。

ネットで川守田字館で検索しますと、中世城館、川守田氏の居館として青森教育委員会の説明板が設けられています。ただ、ネットの解説を読みますと、館跡の大半が国道4号線となっているようです。館跡の正確な復元は発掘調査に負うところが大きいですが、地籍図だけでも規模と形態の概略を知ることができます。

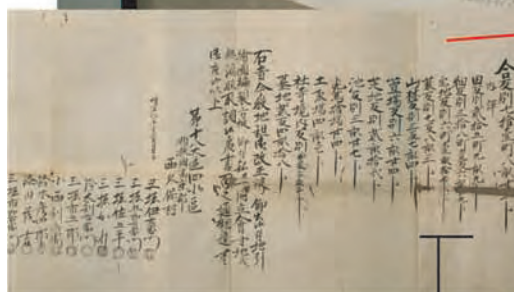
では現在、地籍図はどのような状態で保存されているのでしょうか。作成された目的が土地所有者の確定、登記簿関係ですから、法務局に保管されているものが多いと思います。中には博物館や教育委員会にある場合もあります。私が担当した上ノ町遺跡のある茅ヶ崎市の場合は、横浜地方法務局茅ヶ崎出張所に保管されています。

地籍図は和紙を貼り合わせたものに描かれ、たたまれた状態で保管されており、一枚がかなりの大きさがあります。また100年以上も経っているため、傷んでいる場合も多く、広げるのにも苦労するというのが現状です。

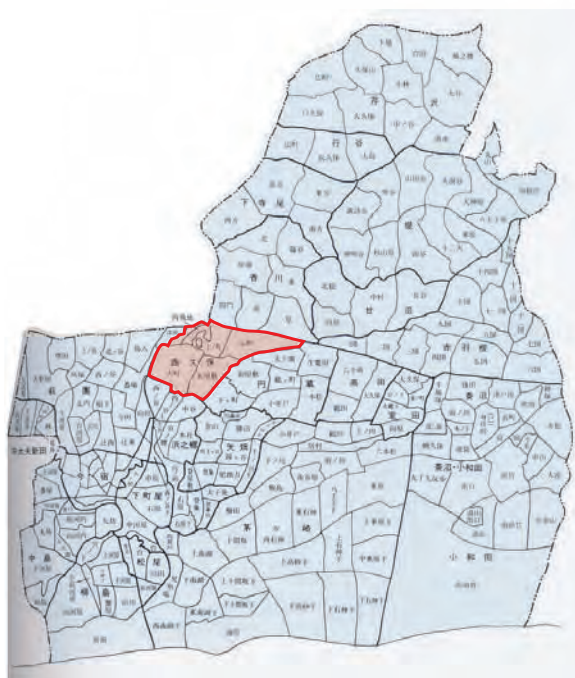
小結

今までの話は必ずしもタイトルの「絵図に見る江戸の町と村」というイメージには合わなかったかもしれませんが、現在は江戸ブームということもありまして、色々な絵図も手軽に入手するともできますので、そういうものを片手に江戸散歩するのも楽しいと思います。すでにそういうツアーやイベントを行っている団体も数多くあると思います。

また、実際に切絵図等を参考に発掘してみると、そこには絵図や文献にはあらわれない新しい発見があります。発掘により当時の実態に沿った姿が見えてくると思います。



西久保村地籍図



茅ヶ崎市行政区画（明治の小字）

『地図集 大地が語る歴史 茅ヶ崎市史現代7』

より（一部改変）

江戸の器（肥前磁器を中心に）

江戸時代、日用雑器として広く流通していたものに肥前磁器があり、これらは一般に古伊万里と呼ばれています。前述したごみ穴からも多量の古伊万里が出土しています。

最後に、現代でも目にする機会の多い古伊万里（染付）を中心に、少しお話したいと思います。ざっくりばらんに骨董市などの話を交えながら話すとともに、遺跡に関わらず江戸のものを手にとってもらおうということで、手近にあるものを用意いたしました。

まず初めにお見せするのは、去年まで調査に参加していました津久井城跡馬場地区（相模原市城山町）から出土しました初期伊万里の吹墨の月兎文の皿です。

江戸時代に佐賀県の有田周辺で焼かれた磁器を総称して古伊万里と呼んでいます。これらは現在でいえば有田焼きでしょうが、伊万里港から船積みされましたので、一般に伊万里の名で呼ばれました。この地方で磁器が焼かれ始めたのは、1610年頃からといわれています。その中で色絵磁器が誕生する1640～50年頃までのものを特に初期伊万里と呼んでいます。

古伊万里の中で一番人気は蕎麦猪口ではないでしょうか。手のひらに収まるサイズで、飾っておいても、コレクションするにも手頃という理由から集める人も多いようです。

その中でも一番ポピュラーなものは、白地に青一色で絵付けされた器、染付ではないでしょうか。これは藍染めのきものを連想させることからこの名がついたといわれています。この青は呉須と呼ばれるコバルトを含む鉱物から作られた釉薬を用いた淡い色を発色します。この青は「枯淡」と呼ばれています。呉須は明治以降になると、青の発色がよい化学的に取り出されたコバルトを使用した釉薬に替わっていきます。これはそれまでの青とは比べものにならない程鮮やかなもので、明治以降のものは、より青に近い色になってきます。この呉須の発色の違いで、詳しくない人でも、江戸時代のものか明治以降のものがだいたいわかんと思います。

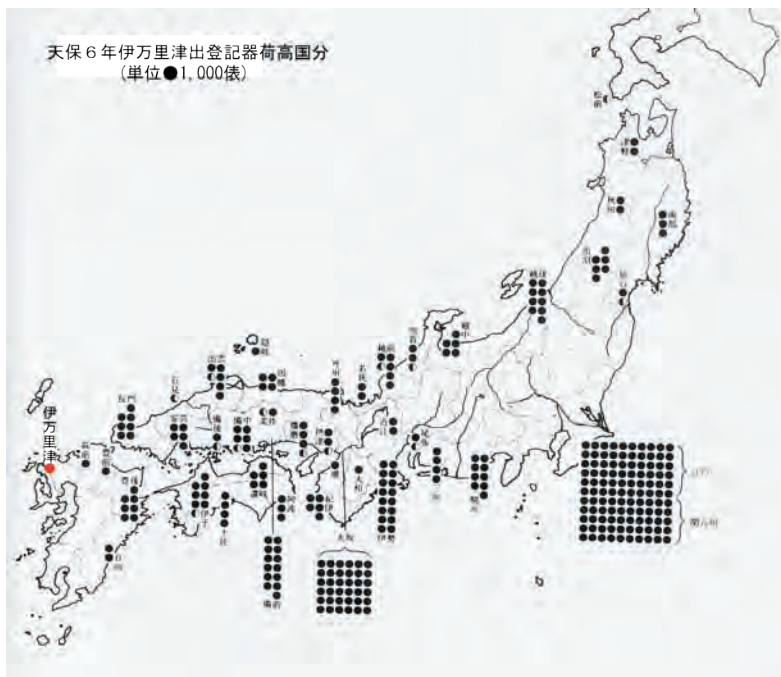
骨董市などへ行ってみますと、人気のある文様に蛸唐草があります。人気のあるものはやはり欲しい人も多く、その分値段も高い傾向にあります。

17世紀～18世紀の初期にかけての蛸唐草は、輪郭線を丁寧に描いてからその中をきちんと濃みで塗り埋めて



染付吹墨月兎文皿（佐賀県立陶磁文化館蔵）
『うまか陶HP』より

『別冊太陽 古伊万里』より



花唐草



萩唐草



みじん唐草
『GENさんの骨董講座』より



大京町遺跡出土鍋島藩窯磁器

『大京町東遺跡』より

いました。しかし18世紀中期から後期になると、輪郭線を描かなくなり、伊万里焼の大衆化による大量生産に伴って次第に簡略化され、幾何学紋様化していきます。このような線書きの唐草文様をタコの足に見立てて、現代になって「蛸唐草」と呼ぶようになったそうです。

唐草文は古代エジプトやメソポタミヤが起源ともいわれ、蔓性植物がそのモチーフになり、その繁殖力の強さから、子孫繁栄等の縁起の良い文様とされています。蛸唐草の比ではないですが、花唐草の器も骨董市で見かけることがあります。花唐草も蛸唐草同様最初は葉や花、細い蔓が丁寧に書き込まれていますが、時代が下がるにつれて形式化し、花唐草→萩唐草→みじん唐草と変化していきます。

骨董市で人気のあるものに、「くらわんか」があります。これも肥前の器で17世紀後葉に安価な磁器として波佐見で焼かれたものです。この名称は淀川を往来する大型船に飲食物を売るときに「飯くらわんか、酒くらわんか」と言いながら波佐見産の器に入れてうっていたことに由来するとされています。わりと肉厚で器の色は灰色を帯びています。

大京町東遺跡では庶民の雑器の他に、数点の鍋島藩窯の遺物が出土しました。これらの器は通称「鍋島」と呼ばれ、藩の完全管理のもと年間の生産数量も決められ、徳川家への献上や大名家への贈答品として作られたものです。鍋島は日常雑器とは全く違う性格のものです。

大京町東遺跡出土の鍋島をお持ちすることはできませんが、写真を載せることでイメージはつかめると思います。ちなみに、同じ物が戸栗美術館に所蔵されていますし、新宿区内藤町遺跡でも出土しています。

最後に余談ですが、骨董市で掘り出し物を見つけるには朝早く行くということと、割れやキズにこだわらず、江戸の雰囲気を楽しむという人なら、割れのあるのを見つけるのもいいでしょう。値段は専門店の1/10以下になっていることもあります。また、それでも高いという人は海岸に陶磁器片を拾いに行くという人もあります。蛸唐草やみじん唐草の磁器片を見つけたときはちょっと感激するかもしれません。

結び

今日の話は入門編ということで、これを機会にもっと知りたい方は、江戸に関する良い本もたくさん出版されていますので、そちらで勉強してもらということにして、今回の話で少しでも江戸時代の文物に興味を持っていただければ幸いです。

そして、江戸のものを探しに散歩にでもでかければ、小さな発見があるかもしれませんね。



くらわんか手中皿

『新宿内藤町遺跡に見る江戸の焼き物と暮らし』より



色絵瑠璃文猪口 (財)戸栗美術館蔵



染付瑠璃文猪口



色絵鍋島猪口陶片 東京大学本郷構内遺跡出土



色絵瑠璃文猪口 「鍋島」朝日新聞社刊より転載

『小さな蓄』(2006年6月号)より

注釈

- 注1：徳川家康は幕府を開いた際、内神田、日本橋、京橋一帯の市街地を整備し、約三百町の町割りをした。これが古町と呼ばれている。
- 注2：『御府内往還其外沿革図書』及び『御府内場末往還其外沿革図書』は、幕府の普請奉行による府内沿革調査の成果を図帳におさめたもので、全部で22冊ある。1～15までが『御府内往還其外沿革図書』で、16以降が『御府内場末往還其外沿革図書』である。東京公文書館と国会図書館に一部を除き所蔵。
- 注3：与力は諸奉行・大番頭・書院番頭等（隊長）の指揮の下に補佐役（中隊長）として、配下の同心を監督して当該職の任務遂行に当たった。同心は頭に所属する下級武士の身分呼称で、それぞれの職務についての庶務、あるいは警衛などの実務を担当した。
- 注4：先手組は本陣の前方に編成された部隊。江戸幕府の職制としての先手組は、鉄砲組と弓組からなる。
- 注5：留守居組は本来主人不在時に城や屋敷を守護する者の意であるが、江戸時代中期には職を歴任した旗本がつく閑職であり、大奥の取り締まり、関所の女手形、江戸城諸門の通行証の発行等管理。
- 注6：拝領屋敷を所有している家々が、屋敷改（江戸府内の武家屋敷などに関する事務をする役職）に提出した記録を基に、支配別に配列編集したもの。
- 注7：將軍の弓や鉄砲を持つ部隊と言う意味であるが、その実態は將軍直衛の弓・鉄砲隊である。
- 注8：基本的な機能は火除のためであるが、場所によってさまざまな使われ方がされていた。
- 注9：検地帳等でそれぞれの地所の記載は一地目、反別、耕作者名を一行に記し、この一連の記述を一筆と称した。

参考文献・HP

- 『図説 江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会編 柏書房 2001
- 『国史大事典』4・10・14、吉川弘文館 1984
- 『日本歴史大事典』1～3、小学館 2000
- 『江戸図の歴史』飯田龍一・俵元昭 築地書館 1988
- 『尾張屋版 嘉永一文久板行 江戸切絵図八 四谷絵図』岩崎美術 2005
- 『改撰江戸大繪圖』江戸東京博物館復刻
- 『分間懷寶實圖』人文社復刻
- 『天保十四（1443）年「御江戸大繪圖」で歩く 東京の寺社と大名庭園』人文社 2003
- 『江戸の穴』古泉弘著 柏書房 1990
- 『江戸の夢の島』伊藤好一著 吉川弘文館 1982
- 『江戸のなりたち1 江戸城・大名屋敷』追川吉生著 新泉社 2007
- 『江戸のなりたち2 武家屋敷・町家』追川吉生著 新泉社 2007
- 『江戸のなりたち3 江戸のライフライン』追川吉生著 新泉社 2008
- 『図説 見取り図読み解く 江戸の暮らし』中江克己 青春出版 2007
- 『江戸の武士の朝から晩まで』歴史の謎を探る会編 河出書房新社 2008
- 『歴史景観の復原』桑原公德編 古今書院 1992
- 『地籍図』桑原公德 学生社 1976
- 『神奈川県明治期地籍図』佐藤甚次郎著 暁院書館 1993
- 『公図 読図の基礎』佐藤甚次郎著 古今書院 1996
- 『住吉町遺跡』新宿区遺跡調査会 1996
- 『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会 1988
- 『坂町遺跡』丸紅株式会社 財団法人新宿区生涯学習財団 2002
- 『大京町東遺跡』医療法人社団永生会 株式会社第三開発 2004
- 『地図で見る新宿区の移り変わり 四谷編』新宿区教育委員会 1983
- 『地図集 大地が語る歴史 茅ヶ崎市史 現代7』茅ヶ崎市編 精興社 1994
- 『別冊太陽 古伊万里』平凡社 1988
- 『別冊太陽 小皿豆皿一〇〇〇』平凡社 1995
- 『小さな蕾 2006 3月号 骨董三昧の日々』創樹社美術出版 2006
- 『美の壺 古伊万里 染付』NHK出版 2006

- 『国税庁メールマガジン第38号』20/08/01 http://www.nta.go.jp/merumaga/backnumber/08_08.htm
- 『東京都公文書館ホームページ 江戸の範囲』http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/0712edo_hanni.htm
- 『東京大学付属図書館ホームページ 地図に見る江戸八百八町』<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai96/index.html>
- 『東京都立図書館ホームページ 特別コレクションの紹介 第11回』<http://www.library.metro.tokyo.jp/17/011/17000.html>
- 『東京都立図書館ホームページ 特別コレクションの紹介 第15回』<http://www.library.metro.tokyo.jp/17/015/17000.html>
- 『Collegio ホームページ 江戸図の宝石』http://collegio.jp/?page_id=154
- 『国際日本文化研究センターホームページ 古地図データベース』<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/menu.html>
- 『goo 地図 古地図』<http://map.goo.ne.jp/history/index.html>
- 『google Earth』
- 『戸栗美術館ホームページ 学芸員の小部屋』<http://www.toguri-museum.or.jp/home.html>
- 『大阪の陣絵巻ホームページ 用語集』<http://tikugo.cool.ne.jp/osaka/yougo/index.html>
- 『うまか陶ホームページ セラミック九州』http://www.umakato.jp/column_ceramic/index.html
- 『GENさんの骨董講座』<http://members.jcom.home.ne.jp/1169576901/antique/sobatyoko.htm>
- 『伊万里焼キッズサイト』<http://www.school-imari.ed.jp/jouhou/kidssite/index.html>